

# 平城京左京五条四坊十六坪の調査

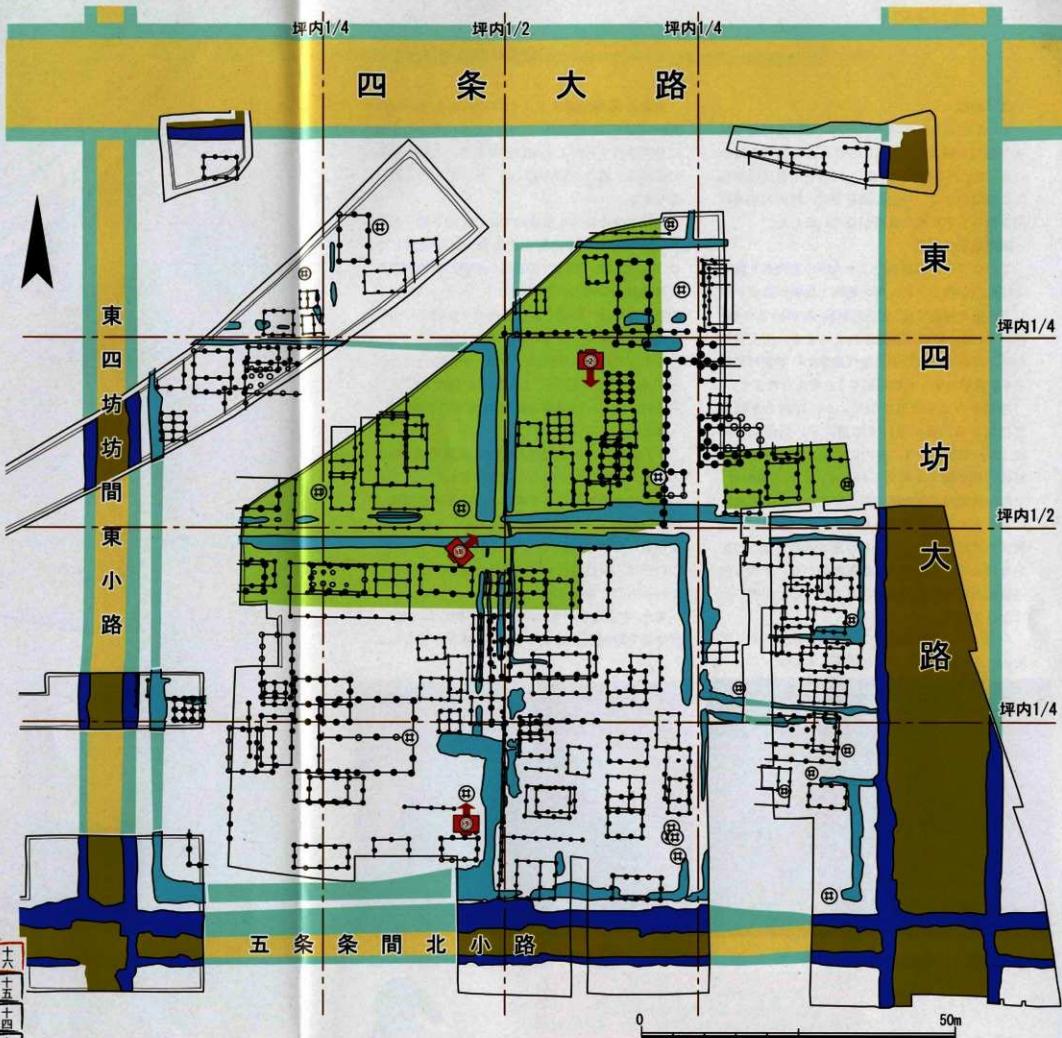
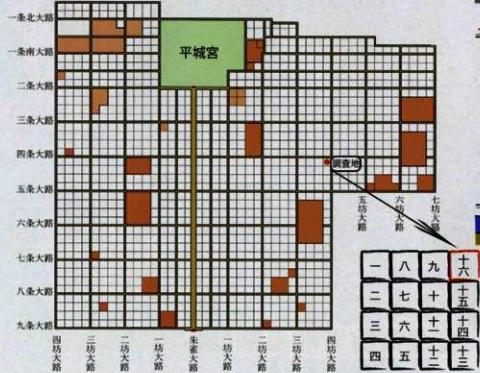
奈良市教育委員会



調査地遠景(南から)



1 坪内通路(南西から) 人が立っている所が通路



平城京左京五条四坊十六坪概念図(1/600)

平城京条坊復元図と坪配置図

## はじめに

平城京左京五条四坊十六坪内では、これまで9次の調査を終え、計約12,600m<sup>2</sup>分の調査が終わりました。平城京跡でも、1坪内を広範囲に調査した例は少なく、今回の調査では、坪内の宅地利用を知る上で貴重な成果が得られました。

## 調査成果の概要

これまでの発掘調査で、十六坪の東西南北端の条坊道路が検出され、坪の範囲と規模が確定しました。また坪内では、掘立柱建物・塀が約200棟、井戸20基、溝等が確認されています。出土遺物から、遺構の時期は奈良時代後半から平安時代前半（8世紀後半～9世紀前半）と考えられます。

遺構の中で特に目を引くのが、坪内を東西南北にはしる二条の平行する溝です。両溝間の幅は1.3～2.0mあり、坪内の宅地に入るための通路の両側の側溝と考えられます。これら通路は、十六坪敷地内の東西南北の1/2または1/4の位置にあります。また通路の延長線上には、細長い土坑状の溝があり、これらも本来は通路だったと想定されます。この通路の位置関係から、十六坪内は数区画に分割して利用されていたことが明らかになりました。

一方、井戸の分布は、大小区画にかぎらず、区内の南東隅に掘られる傾向があります。

通路と遺構配置から、十六坪内は大きい順に3/8・1/4・1/8・3/16・1/16・1/24・1/32の宅地に分割されていたことがわかります。これら宅地の面積は、最大で約4800m<sup>2</sup>、最小でも約450m<sup>2</sup>あります。

面積が最大の3/8宅地内では、梁間5間・桁行き5間等の大規模な掘立柱建物を数棟配置したり、梁間2間・桁行き3間の小規模な建物が整然と複数並んで建つののが特徴です。一方1/16以下の宅地内には、梁間2間・桁行き3間等の小規模な建物が数棟見られるのみです。

このように十六坪内は、合併・分割を行いながら大小の宅地が混在しているのが特徴と言えます。残念ながら各宅地の居住者や性格は不明です。

## まとめ

十六坪では坪内の通路が明瞭に確認でき、坪内の宅地の区画状況が明らかになりました。各宅地の規模は小ささまでありますが、坪内を東西南北に四等分した1/16の区画を基本とし、この1区画を単位に合併・分割を行っていると考えられます。これらは、奈良時代の宅地班給方法の一端を示しているものと考えられます。

また、中小規模の宅地内の様相が明らかになり、当時の宅地利用を知る上で貴重な成果が得られました。



2 掘立柱建物群(北から)



3 井戸(南から)

